
少年少女のソノリティ

佐久間 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女のソノリティ

【Zコード】

Z3897Y

【作者名】

佐久間 朔

【あらすじ】

春からこの狭丘学校に通う事になつた俺。バンドやりながら平和に過ごそうと思つたんだけど…衝撃的な出会いをした少女とか親友達とかバンドメンバーを巻き込んで平和どころか落ち着けない学園生活に…皆と騒ぎながらもバンドを続けて行く俺達。笑つたり泣いたり喧嘩しながらも平和な日常を過ごしている。——さあ今日も楽しくおかしくそして真面目に練習そして笑顔でこの日々を送ろう。

新たなる始まり（前書き）

前のアカウントを消しての再投稿です。
題名とか色々いじっています。

新たなる始まり

「春。俺一阪上芳樹さかがみよしきくは高校生になつた。と言つても半分くらいは地元の友達だつたりするからあまり変わり様がない気もするのだが、やはり新しい所は胸が踊る。」

俺の通う学校：狭丘学校。4階建て3棟、温水プール完備、ライブスタジオ完備というなんとまあ公立高校の割にはやたらと設備の良い学校だ。

入学式なので、小学校からの友人 南部幸平なんべこうへいくとこの学校の入学式に来た。

短髪で容姿端麗どちらかといふと可愛い系か？凄く優しい雰囲気の俺の親友だ。

「やっぱり、新しい学校はいいね…」

今縁側にいるおじいちゃんの様なほんわかした表情だ。これが女子の心を捉えるのか？と思つ。

「言つておくけど、芳樹もかっこいいからね？」

「かつこよくなはないが…どうやって心の声を読んだ？」「高校で良い事有るといいねえ…」

「いや、話の話題そりげなく変えないでくれない？」

「あはは…」めぐらめぐら。でも、ちゅうとワクワクしない?」

確かにそうだなと言い返し、何と無く校舎を仰ぎみる。

彼処の3年間でどんな出会いがあつてどんな人と会つてどんな風に過ごすのかな…

「…芳樹、カッコつけてる?」

「今の感傷的な気分返して!」

ボコつと殴つた。幼馴染つてのはいいけど心の中まで見透かされるから嫌だ。

俺たちは入学式が行われる体育館に入ってきた。ここで一緒にクラス発表も込めてしてしまつらしい。張り紙に貼つて有るクラスの名簿を見てクラス別に座るらしい。

「おーい、芳樹くん! 幸平くん!
こつちだよ!」

ソプラノが響いた様な声がした。隣を見ると幸平が笑顔になつてた。分かりやすい。

「真琴さん! 同じクラス? !」

「うん! 芳樹くんもだよ! 宜しくね?」

「ああ、真琴さん。宜しく!」

俺たちが真琴と読んだ女の子…磯部真琴だ。俺の場合は中学からの友人。幸平は幼稚園の時の幼馴染らしい。

150cmぐらいしかない身長。茶髪黒目…この茶髪は地毛らしい。後ろに一本で束ねられてる髪はどこか尻尾に見える。

何処かリストの様な小動物を彷彿させる。目とか完全にリストだしさ…！

で、幸平の好きな人。こんなに分かりやすかつたら直ぐに分かるよな。不思議な事に真琴さんはわかつてないんだ。

で、真琴さんは幸平の事が好き。前にもバレンタインデーやら何やらで相談されてる。

もう、焦れつたい…何かのラブコメ見てるみたいな感じだ。

「でさー……でねー……」「へー……それってセー……」

あら、見事に一人の世界になつて俺は取り残されたよ…

とりあえず入学式が始まるまで寝る事にしますか…

俺が起きると入学式が始まつてた。後ろにいた金髪のいかにも遊び人みたいな奴に起こされて気づいた。隣は幸平なのだが…まだ真琴

わざと話して「あ…

色恋もいいけど、少しは親友と見ひや。

いろんな思いを混せて幸平の足を踏んだ。

叫び声が響いたのはしじうがない。お前が悪い。

始業式が終わると教室に入らされ教員が来るまで待機になつた。

俺はたまたま隣になつた幸平と話していた。

「今日、芳樹の家に行つていい?」

「ああ、いいぞ。でも、散らかつてるからな」

「ああ、ギターね…触らせてくれる?」

「構わんよ」

今出たけど、俺はギターが好きだ。Freedomってバンドにハマつて始めたんだ。

かれこれ2年はやつてるのかな。やるほどハマるから楽しいんだ。

「…寝るから適当に起こしてくれ…」

「ん、分かったよ」

そつじて俺は意識を闇びした。

何か夢を見たが…忘れた。といあえず、帰つて幸平と遊びつ。
隣にいる幸平に声を掛けて学校を後にした。

新たなる始まり（後書き）

感想お待ちしています

裏面の注意（前書き）

初めは芳樹の夢です。

寝過ぎた注意

何か夢を見た気がする…横には髪の長い少女。

俺は彼女と手を繋いで歩いている。

周囲には幸平達がいる。

なんだら…暖かい…

俺は少女に向かって話しかけてる。

なあ、ほーーー

なあに、芳樹

私も

そしてホワイトアウトして行ぐー

田覚ましの音が聞こえている。

もつ起きなきやな…

ふと時間を見ると8：00。こつも田覚ましはこの時間だからこのまま寝ても大丈夫かな…

いや、ちょっと待て。今日学校じゃないのか？

ガバッと起き上がり、万能時計で日付と曜日を確認する。4／10
木曜日。天気は晴れ、湿度は40%…ヤバイ！

咄嗟に布団から飛び降りようとすると足が縛れ、いい感じに頭から
床と衝突した。痛い…

朝ご飯作らなきゃと思ったけどやめた。適当にブロック食品を食べ
て腹を満たす。

ウチには母親も父親も居ない。

居ないと言つのには語弊があるが、父親は他県で赴任中。
何にも新しい事業の開発で責任者に大抜擢されたとか。
詳しく述べられない。

で、母親の方はその父親を追いかけて行つた為、俺は1人寂しくこ
こで暮らす…と。

それが分かったのは高校に受かつてからだつたから今更受験し直す
のが面倒だった、というのもある。

友人が居るからもある。

さて、部屋をかたして必要な物をエナメルバックに詰め込んで家を
出ると既に8：15過ぎだつた。
何に手間取つてたのやら…

今から走つて行けば…多分間に合つ筈。

と思い、バックを抱き直して走り出した。

「セイセイセイセイ…」

ずっと走り続けるのは酷なのだ。でも10分近く走り続けると思う。でもそのお陰で残すところの学校に着く直線道路だけだ。ここまで来れば多分間に合ひ筈だ。

少し舐めてた。と言つのも自分のクラスは下駄箱から最も離れた場所にあつたのだ。いや、今思い出した。

と言つわけで俺はまた全力疾走。階段とか2段飛ばしです。バックが取り残されない様にギシギシ音を立てて耐えてる。

「や！お前！危ないから止まれ！」

凛とした声が聞こえた。

上を見てみると黒髪がなびいていた。つか、どんな髪なげなんだ！腰まで有るぞ？

これが一瞬の出来事。体は動かずその女子に突っ込んで行った。情けなさすぎだ…

「 きや あー 」

「 つわつー 」

咄嗟に底おうとして俺が下敷きになる。床に叩きつけられた瞬間、肺から強制的に二酸化炭素が吐き出された。

「 うほつ うほつ … 大丈夫か、あんた? 」

自分の体の上に覆いかぶさつてゐる少女に話しかける。少女は心配と憤怒が混ざつたような顔で見て來た。何と器用な…！

「 走つてくるからでしょー 大丈夫、あんた? 」

「 大丈夫だから… 早くどいて 」

色々マズイんだ。何がマズイかは想像にお任せします。

少女が退いてくれると急いでたことを思い出した。

「 とりあえず、急いでるから… 」

キーンゴーンカーンゴーン…

よく聞く学校のチャイムが鳴つた。つまりは 8:30、HR が始ま
る時間。

遅刻つて事。

俺は少女に早く教室行けよと声を掛けて慌てて教室に入る。

そこには担任の初老の人が居て、頭を出席簿で叩かれた。

初日から遅刻とか最悪だ…！

感想お待ちしています

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則（前書き）

幸平君と真琴さんやらかします。

因みに芳樹君はハイスペックな高校生です。

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則

「やあ、間に合わなかつたねえ…」

「走つたから間に合つと思つたんだけどな」

隣にいる幸平が話掛けてきた為、振り向く。

「何か災難だね。僕が起こしに行つてあげれば良かつた?」

「男に起こされる趣味は持ち合わせてねえよ」

やめてくれ、開眼一番こいつの顔とか。生きてる心地がしなくなるわ。

「あはは。で、何で遅れたの?今日のテスト勉強?それともギターでもやつてたのかな?」

「ああ……ちょっと音のレパートリーを増やしたくてエフェクターをちょっと…え? テスト?」

え、何それ。聞いてないぞ?

「うん、何か新入生テストするつて言つてたよ?」

「え、知らないんだが…」

「いや、しつかり帰りのホームルームで言つてたよ。主要三科目のテスト」

…マジすか。昨日寝てた時か？

「芳樹、爆睡してたからねー」

「いや、起こせよー」

声を張り上げたため近くの女子がビクッとさせてしまった。誤った所で…

ガララッ！

「をし、テストやるや〜〜」

もつ諦めた。しるか、テストなんて。適当にやつて睡眠時間確保したるわ。

「おーい？芳樹？早く顔上げて？」

「…嫌だ」

中学校の復習に近かつたからそんなには難しくなかつたけどさあ

「…分かるか、幸平？この漢文を現代訳しろなんて？」

「ああ、分からぬよ…あついう問題は嫌いなんだよねー。」

できない仲間を見つけて喜ぶのは性だと想つ。で、開き直ると。皆

もするよな……え、しない？

「だよな！無理だよな！」

「うん、それだけできなかつた気がするよ

一瞬でも仲間だと思つた俺が馬鹿だつた。今から制裁を…

「2人で何話してゐるのかな？」

真琴さんが話しかけてきた。うん、1口ぶつり。

「や、やあ真琴」

「よひ」

どもりながらも返す幸平と俺。「こんなに好意が体面に現れてゐるのに気づかない真琴さんも凄いものだ。いや、真琴さんも同じ様な感じだけど。

「いや、ちよつとさつきのテストの話をしていてね…それできなかつた問題あつたといつ話なんだけど」

「へえ…そう言えればわたし数学ダメだつたなあ…」

「真琴さんは数学？僕は漢文だめだつたよ」

「え？ そうなの？じゃあた…」

「えー、何…？」

わいわいきやいきやい、完全に2人の世界。世界が終るまでは…いや、違うか。

俺の目の前でいちやつき始めましたよ。真琴は真琴でむつちや笑顔だしや。

「もう、お前ら付き合つちまえよ。さつ俺は思った。いや、誰でも思ひ箭だ！」

「すげえな、あいつら…あれで付き合つてねえんだろ?」

ほら、居た！嬉しくなつて振り返ると昨日起こしてくれたチャラチヤラした男がいた。確か…

「紗東？」

紗東翔一と自己紹介してたのを思い出す。うん、クラスメイトの名前を頑張つて覚えるのが溶け込む第一のコツ。

「何て、他人行儀な！翔一て呼んでよー俺も芳樹つて呼ぶからさー…

やつぱ、言つ事はチャラいなあ…いや、これでチャラいとか言つてると小説の登場人物で会つた途端に下の名前で読んでくれとこいつが全てチャラくなるんだけれども。

「ほらほら、遠慮しないの！呼んでみ、芳樹？」

俺の沈黙は困つてると解釈されたらしい。まあ、別に読んでも良いんだけどね。

「ああ、宜しくな翔一」

「お、呼んでもくれた。宜しく頼むぜ、芳樹！」

友達一人できました。

「やついいえばや、俺ベースやってるんだけど…芳樹は何か楽器やってるの？」

「うん、ギターなら…」

「えつ、マジかよー一緒にバンド組もつぜー!」

何か結成したのが40歳くらいだった有名バンドを彷彿させる様なワードだけど…

「やばいひー」

悲しいかな、楽器を持つてる人同志は仲が良くなりやすいんだ。

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則（後書き）

感想お待ちしています

弁当は暖かいと弁当とは言わない（前書き）

色々人の小説読んると…何か文字数が少ない様な…

弁当は暖かいと弁当とは言わない

朝、俺はもう遅刻しない様にしつかりと目覚ましをかけて定時に起きてコンビニで昼飯を買って学校に着いた。

教室に入ると幸平と真琴さんが話していた。大方、一緒に登校と言う事だらつ。

「あ、おはよー芳樹」

「おはよう、芳樹くん」

「おっす…相変わらず仲がよろしい事で」

軽い皮肉を入れてやつた。朝からこちやつかれると満腹感が凄いのだ…逆恨みでは無い、決して。

「やだあ、仲が良いなんて…」

「ねえー」

ダメだ…バカップルにはこんな効かねえ…

「おっす、芳樹…何、この雰囲気」

肩に手をかけられたから振り返ると翔一がいかにも爽やそうな顔で居た。

「やつぱ、あこつら付き合ひてるんじゃね?」

「俺が知る限り付き合つてるとかは聞いてないぞ？」
「でも…あれ相当年数の経つたカツプルの会話だぞ？」

耳をすませば（これが何なのか分かる人は挙手）「明日はおひしてあげる」やう「明日はたまには変わつた喫茶店で」だの、聞こえてくる。

「うつわ、本当だ。甘つたるー」

見るに耐えない映像だ。どつかの動画サイトに投稿したらきっと「リア充氏ね」つて帰つてくるだろ？。ほぼ100%

「で、あいつがどうするの？」
「…ほつとくしかなによ」

中学から同じだから分かるのだが、ああなると止められなくなる。時々グループ学習で同じ様に甘い雰囲気を出してて教師も呆れただいだ。

因みに俺やそれなりに知つてる友人は生暖かい目で見てた。

「じゃあ、ほつとこいつ。どうせ、止めらん無いんだろ？」

うん、と返しバカツプル共を眺める。よく、飽きないね。

HRが始まると流石に甘い雰囲気は無くなつた。HRが始まつても雰囲気を出してたのなら本格的に引き離す事を考えた方が良い気がする。

担任曰く、今日から1週間で部活動を決めるらしい。提出用紙やら
部活動一覧用紙を渡された。まあ、元々軽音楽部に入るつもりだから
明日にでも出すかな。

HRが終わると翔一と幸平が俺の所にやつてきた。

「翔一と芳樹は軽音楽部だつけ？」

「おひ、そうだな。前に翔一とバンドを組む約束をしたしな」

結構軽いノリだつたけど、ここなら何だか行けそうな気がしてきてから…本気でやる事にした。

「んで、幸平は真琴さんとビートに入るんだ？」

「…僕は翔一の中で真琴とどつかに入るのが普通になつてゐるのかな？」

「うん」

「悪いが、俺もそう思つ」

「まあ、事実なんだけどね」

マジかよ…部活内での雰囲気を出したなら…部活崩壊しそうだな…
…アーメン。別にキリスト教徒
と言つわけではありません。

「で、どこに入るんだ？」

「うん、天文学部にでも入るうかなと」

「へえ、幸平つて星とか好きなの？」

いや、俺も知らない。どうなんだ？

「いや、そういうわけじゃ無いんだけど…まあ、真琴が興味あるから入りたくなつただけなんだけね」

結局、それかよ…と思い溜息をつく。どうにかしてくれ、このカツプル。

始めての授業…昨日やつた箸のテストが返却された。何か添削早くねえか?仕事量凄いな。

「うつわ、最悪…」

で、結果は全体的に70点位。流石に凸む。中学生時代は90点連発だったんだが…やっぱ高校の勉強は難しいところことだらけ。明日からは頑張らねば…

「芳樹…どうだった?」

「んあ、平均70ぐらい」

すると幸平はびっくりした声で叫んだ。

「凄いね!慌ててきて遅刻したのに…実は勉強してた?」

「いや、全く。つか、これって中学の復習だろ?そんなに難しい訳じや…」

「これで、相当難しい問題集から引っ張ってきてる感じよ

…へえ、道理で習つたやり方じゃ解けないわけだ。

「俺、勉強したけど平均30だからな」

と翔一が見せびらかす。

「芳樹はなんやかんや言つてやるよなー。凄いよ…」

と幸平が笑いながら言つ。まあ凄いのかな?と適当に流す。

「流すな!俺がいたたまれない!」

「めん、スルー。

昼食、俺は今朝のコンビニ弁当を広げた。冷めても美味しいのが弁当だと思つ。

で、幸平は真琴さんに引つたくられてどこかに行つた。今は翔一が前の席に座つてゐる。

「…？お前飯は？」

「いや、もうすぐで来るよ」

何言つてんだ、こつとく思つと翔一くんと呼ぶ声がした。

「おつ、緋奈…こつもありがとな」

「いえいえ…将来の予行演習ですしね」

小綺麗な人が入つてきた。茶髪に少しフワフワしたような髪。全体

的にお嬢様みたいな雰囲気を出してくる。いじりん所びつくつする」とがたくさんあります。

「し、翔一。その人誰だ？」

すると翔一は何とも言えない表情を示し、女の子は笑顔になった。たまたま近くを通りかかったクラスメイト（男子）は思わず見入つていた。

「ええとね……」いつはね……

「翔一君と私は許嫁です！」

「えつ……つて許嫁え？！」

「どうなってる、俺の周りは！」

弁当は暖かいと弁当とは言わない（後輩も）

好きです、ジブリ映画。

衝撃的（笑劇的）な出会い（前書き）

登場人物が揃いつつあります。

衝撃的（笑劇的）な出会い

「おい、緋奈！芳樹が混乱してるぞ。」

「あらあら…どうしましょひ」

「ふふふっと上品に笑う。

「で？説明してくれんか？」

「…ああ」

翔一が緋奈と呼んだ女の子は銀央緋奈と言い、翔一の婚約者。
銀央家は紗東家と親同士が同級生でもし男と女が生まれたら結婚させようと宴会でノリで決められたらしい。

この場合、後悔してるのはどっちやら…

でも、銀央さんは嫌では無くむしろ翔一と一緒になれる事が嬉しいらしい。なので婚約は破棄されずに残つてゐ、と。

「これどこの漫画の展開だ！」

「ちょ、芳樹？！」

「あれか？！幸平といい翔一といい独り身の俺に対する侮辱か？！」

「ちくしょひー…」

「落ち着けー…！」

「はあ……落ち着いたか？」

「うん……」

そりや落ち着くよ。翔一に思いつきり頭から水をぶつけられたもの。お陰でワイヤーシャンはビショビショだ。今はベランダに干して有る。

ふと周りを気にしてなかつたから見てみると俺に同情するような目で見えてくるクラスの女子。

お願いだからそんな目で見るな。悲しくなるわ。

「ふう……しかし婚約者ねえ……」

「そんなの昔に滅びたもんだと思つてた」

確かに一家の当主が娘を嫁に出すとか前に歴史で学んだ気がする。

「私は滅びてないと思いますよ。現にここありますから」

と言つて翔一にキスをした……てえ？！

「おー、緋奈！何してんだ？！」

「何つて、キス」

「そう意味じゃなくて、どうしてこいつをじつくるんだー！」

ギヤーギヤーワーク。クラスからは翔一滅殺計画も練られてるつぽい。本当に殺さねかねん。

その言い争いは次の授業が始まるまで続いた。

出て行く際に銀央さんは

「今夜は全て搾り取つて私が母親になるまで付き合つてもらいます！」

とどう考えたつてそつちにしかとりえられないようなセリフを残して消えた。

放課後、部活動見学とやらがあるみたいで翔一に誘われたから行く事にした。

俺としてはさっさと帰つて明日にでも部活動参加用紙を提出したいんだけどな。

まあ、雰囲気だけでも味わいに行きますか。

どうやら新入生歓迎ライブとやらもるらしく、俺はそれに行く事にした。

特設プレハブには人で溢れていた。ただ、全員が全員軽音楽部に入るわけでも無いだろう。多分、物珍しいから来たミーハーな人達だと思う。

「うわあ、スゲえな

「だから物珍しさに来ただけだつて

「いや、まだ一回しか言ってないよね？！」

「心の中で言ったわ！」

「知るか！」

まあ時間つぶしなつた気がする。

それから程なくしてライブが始まった。全員が静かになる所が凄いと思つた。

「今日は来てくれてありがとうー部長の立川です。最後まで楽しんで行ってくれたらなと思つてます。では、最初のバンド、どうぞー！」

と入場してきて最初の演奏が始まった。会場もみんな乗つていて、隣にいる翔一も楽しそうだ。

ライブはプロアマ関係なく一体感が出るから楽しいんだよな。

最後のバンドは部長がボーカルを勤めてるバンドだった。

それなんだが…本当にアマかと言えるレベルでうまかった。リズム陣は安定しながらも自己主張してるしギターもやってるから分かるが慌てる事が無くてゆとりを持つて引いてる。ボーカルも伸びが良くて高音も外さない。

それはロック曲でもバラード曲もはずはなかつた。

会場が熱狂に包まれる中、俺は完全に魂がそのバンドに奪われていった。

外に出ると俺はまだ体が熱を持っている事に気がついた。相当熱中したのだろう。

「やべえな…あのベースみたか?ステイングレイだぞ…しかも学生とかのレベル超えてるだろ…」

「凄いよね」

高校の間… あの人達をリストペクトしたい。 いつか一緒に…

「いつか一緒に対バンライブできるといいな」

「お、そうだな」

あつと、口に出てきた。

さて…帰るかな。翔一誘うかな。

「あ、あんた！」

「んあ？ 何だ？」

振り返ると腰まである髪の毛。見事な黒だ。真琴さんや銀央さんは可愛い系だとするとこいつは美人系だろうか。

「おい、この美人さん誰だ？ 知り合いか？」

いや、知り合いならお前とか言わないだろ？ とりあえず言つ事は一つ！

「…誰だ？ あんた？」

正直、覚えがない。女の子がガクッとこけた。お、ドリフだ。

「「ひー少し前に階段で走るなと注意したでしょ？」

あー…何か居た様な居ない様な…

「…うーん…ああ、あのときの一緒に遅刻した仲間か？」

「仲間じゃないわよ！お陰での日は遅刻だつたんだからね…」

「大丈夫だ、俺も遅刻だ」

「あんたは自業自得だろーが！」

ギヤーとか言い始めた。周りがこっちを見てるよ。うるさいからボリューム下げないか？田の前の少女はそれに気づいたのか赤くなつてボリュームを下げてくれた。ほつ…

「…えと…」めんな?

「つこつ時は素直に謝る。それが正しい。巻き添えにしちまつたんだしな。

「べ、別に良いわよ」

何か更に赤くなつた。きつとあつせつと謝れられたから恥かしいのだろう。

「赤尾穂奈美」

「え？」

「私の名前よ。で、あんたは？」

「坂上芳樹だ。気軽に芳樹とでもわかるけどもよしきんとでも読んでくれ」

「何よ、それ…分かつたわ芳樹。私も穂奈美で良いから」

因みにさかみんは俺の中学時代のあだ名な。その頃何かと人の名前を
を みんとか呼ぶブームがあつて、さかみんと呼ばれた。

「穂奈美ちゃん、ここにいたんですか？あら、翔一君に芳樹君
「おひ、緋奈か」

銀央さんだ。つか、銀央つて苗字すげえよな、誰だ考えたやつは。

「穂奈美さんと知り合ったのですか？」

「いや、俺は今知り合った。芳樹は階段で衝撃的な出会いをした

らしい

「衝撃も受けたけどね」

誰がうまい事を言えど。

「私、穂奈美さんと同じクラスで初めて話したお友達なのですよ

「ほうほつ…あ、穂奈美？」

「何、芳樹？」

「あんな、銀央さんとそこにいる翔一はな…」

許嫁だとしつづり仰天。俺と全く同じ反応したよ。

俺は気まずくなつて顔を逸らし、銀央さんと翔一はニヤニヤ。
分かつてない穂奈美は首を傾げていた。

衝撃的（笑劇的）な出会い（後書き）

アクセス数伸びますように（笑）

〃一テイঁング（前書き）

実は… 40話近くストックあります。今はそれを編集して投稿しか
できませんがね…

//一テイント

数日後、部活動参加用紙を提出した俺らに軽音楽部から今日//一テイントがあるから集まる通達が来た。多分、顔合わせとかするんだろうな。

「なあなあ芳樹？」

「うん？」

「厳つい奴いるかなあ？」

「日本語使い方おかしくねえ？」

凄いやつに言い換えた方が良かろう。

「あれ、芳樹達集まり有るの？」

と幸平が話しかけてきた。何か二二二二と上機嫌つぽい。

「うしごれ、ほれ」

俺は幸平に紙を見せてやる。

「へえ、もつ集まるんだ。天文学部なんか来週の月曜日に集まるからうしごれよ」

「ありま、案外遅いのね。で？」

「でつて? 何で、翔一?」

「真琴さんに入るの?」

「ヤーヤーヤーヤ。真っ赤になる幸平を見て何か完全にゲスっぽい

にやけ顔の翔一。ただ、俺は注意できないぞ？

だつて、俺も何か一ニヤニヤしてんだもん！

天文学部には、「めんだがとりあえず惚気まくつて当ひてやれ。
そしてまだ見ぬ天文学部よ、アーメン。

放課後、指定された教室に入る。まあ視聴覚室つてやつだ。すると
もう人が来てたのか20人ぐらいの人が入つてた。

「やつほー、芳樹！紗東くん！」

と呼ばれたから見てみると穂奈美と…あれ、銀央さん？

「おう、一人とも…軽音楽部だな？」

「そうよ、じやなきやここに居ないわよ」

「私もそうですよ、翔一君。手取り足取りバンドつてのを教えてく
ださいね」

「あ、ああ…」

何かどもる翔一。

どうにも穂奈美は中学校で合唱団に入つてたらしく歌はそれなりに
は…と言つてた。実際聞いてみないと優劣はつけらんないから保留。
そのうち拝聴したいものだ。

で、銀央さんは穂奈美に誘われたらしく。何でもピアノをやっているらしいね。

その手のコンクールに何度も出て賞を取りてゐるらしい。因みに翔一お墨付き。

「へえ、じゃあ翔一くんどうバンドやるの?」

「まあ、そうだな」

「頑張つてくださいね、ライブ絶対に行きますからー。」

「うん、そうだね……」

何か翔一の様子が変だ……いや、進化はしないけどね。

「どうした、翔一?」

「……あんな事があつたからまともに緋奈を見らんない」

「はあ?」

何にも……あれだ。男女の契りってやつを昨晩ずっと翔一が枯れるまでやらされたらしい。ついにや、銀央さんにつにまして輝いてるようだ……?

いや、気のせいだ。気のせいであると願おつ。

「翔一くん……恥ずかしいからあまり人に言わないでください……」

「……」

もづダメだ、こつらも。

ほど無くして部長と……顧問かな?が入ってきた。

「おつかれ、新入生ビも…よく来てくれた、ありがとう…」

どんにも部長はフランクな人らしい。前に立ちながらもヘラヘラしてゐ。

「俺の名前は…いいか。そのうち教えるわ！顧問は…いいよね？」
「いや、一応名乗らうよ？顧問の古利根です。宜しく」

ペコリと頭を下げた。礼儀正しい人だと勝手に評価。

「じゃー俺かー…立川でふ

でふ？！そんなツッコミが思わず声にしてしまった俺。

「あ、いや…すみません」

「何やー、謝る事ないよー。ツッコミありがとー。」

気にせず話しある部長こと立川先輩。あまり細かい事は気にしない人なのかな。

で、これから1週間かけてバンドを固めるらしい。人数は自由だけど流石に20人まとめて一つのバンドは勘弁してくれと立川先輩から。うん、俺もそれは怖いと思つ。

「えと…あんたら経験者か？」

「こいつは昨日だ」

「多分、そっちじゃない。つか、変なこと言つたな！」

振り返るとむすつとした男が立つてた。メガネかけてどこか理知的

だ。

「いや… あなたたちは何か楽器をやり続けるのか？ 夜の方ではないからな」

ありやま、何か悟られてらあ。

「一応、俺はギターは3年。翔一は？」

「俺も3年だ、因みにベースな」

すると男は笑みを浮かべた。これ、女泣かせの笑みだな。

「良かった。俺はドラム10年やつてるんだ。どうだ、一緒にやるんか？」

「ちょええ？！」

10年だと一つて事は… 6歳から？！

「あ… 親父がドラムやっててそのおじいばれを貰つてな」

「ひょえ… すげえな」

びっくりしてると男の子は改めてこう言った。

「で、俺をドラムとしてバンドにいれてくれないか？」

翔一に耳配せをすると[意]の意思が帰ってきたので決めた。

「ああ、宜しくなー！」

ドラマゲット。後はボーカルだな。
もっと時間がかかると思ってたんだけど…案外あっさりしてた。

ミーティング（後書き）

何かお気に入り登録をしてくれた方が1人… ありがたやありがたや。

頑張りますねー！

これが次は水曜日に更新する予定です。

少年少女の恋愛（恋書）

それで…元の話よつとくなつてきました。

少年少女の会合

「お、そうか！俺は遠藤信汰って言つんだ、宜しくな」

「ああ、俺は坂上芳樹」

「んで、俺は紗東翔一な」

簡単な自己紹介を行つた。うん、結構行けそうだね。

次の日、俺はバイトしてると言つ信汰は置いて翔一とボーカル探しに繰り出した。

「でも、どうやって探すのさ？拡声器使ってボーカルやらんかー？とか聞けないだろ？」「いや、何か前にコンタクト取つてきたボーカルが居たからそいつから当たろうと思う」

「…いつも間に翔一の所に？」

「昨日の後に話したんだ」

どうにもあるの後解散した時にもう一人着たそつな。

「で、会えんの？」

「ん、校門に居るらしい」

「んじゃあ、ま、行くか」

教科書やらノートをバッグに入れる。関係無いが筆箱はいつも置いて帰つてゐる。帰つたつてシャーペンぐらにはあるからね。

「うつわ、こいつ教科書持ち帰つてるよ」

「…翔一は持ち帰つて無いんか？」

「もち！」

「いや、威張れないからね？」

それよりも早くじょづばと言われたので走つた。
さて、どんなやつかな？

校門に行くとなーんか目が細い…狐っぽいのがいた。うん、名前聞くまで狐で行こう、うん。

「おっす、ボーカル志望」

「ちいーす、ボーカル志望でつす」

「ははっ…一応暫定リーダー連れてきたぜ？」

「おお、宜しくな！」

「あ、ああ…」

何だ何だ？何か流される。会話に着いて行けてない。

「で、名前は？」

「えつ…坂上芳樹だ」

「宜しくうー俺は権大寺龍な！」

「あ、宜しく…」

すっげえ名前。純和風やん。親は寺の人か？

「 そうだ、言つとくけど俺は寺の人じゃないからな。いつも自己紹介の時に聞かれるんだよなあ
「へえ… なんだ?」

何とも掴みづらいやつだな。

「 で、俺は入れてくれんの?」

「 ん、ああ。因みにボーカルどんくらいやつてる?」

「 中学の時にやつてたから3年目かな。歌自体は小学校から歌つて
るから多分ピッチはハズさねえよ」

「 へえ、凄いな。小学校か…」

何かドラマの信汰と言い龍と言いとんでもないのいないか?

「 あれ、お揃い?」

すると信汰が下駄箱から出てきた。何かしてたのかね。

「 この人ドラマか?」

「 そうだね… こいつはボーカル志望の権大寺龍

「 ん、宜しくな。遠藤信汰だ」

「 で、これで形になつたのか?」

形になりすぎだ。凄いのが集まりやがった。

後日、スタジオに行く事になつてこの場は解散になつた。

数日後… スタジオの帰り道。あいつら本当凄かつた。龍は高音から低音まで安定してるし翔一のベースも良かつた。リズムを崩さずベース以上の働きをしていた。

信汰はタム回しが良かつた。高校生からツインペダルとは思わなかつたけど…

俺、大丈夫かなあ？ 翔一は大丈夫だとは言われたけど。あいつらを見ると萎縮しちまう。

「ふう…」

「何、溜息吐いてるの？ 幸せ逃げるよ？」

「えつ… お前が」

「お前か、じゃない！ 私は赤尾穂奈美つて名前あるよ」

穂奈美に会つた。手には… 本屋の袋を握つてる。本屋帰りかね。

「で、何で溜息吐いたの？ おねーさんに話してみなさい？」

「おねーさんつて… 同い年だろつ？」

確かに知らなきやおねーさんとやらに見えなくも無いが。

「良いのー… 良いから話してみなさい？」

「へいへい… えと…」

話してみた。集めた奴らが上手過ぎて着いていけるか心配なこと。居ても平気なのかという事も。

「えと… あんたバカ？」

「バカゆーな！」

「これが悩みなんだぞー。しつかりと返事せい！」

「えとむ、まだ一回しかやつてないのに今からそんなの氣にしてたら氣が持たないわよ？何度もやつてそれでダメだつたら練習するなり何なり悩めばいいじゃない。モチベーション下がるわよ？」

「まあ、そりなんだけどさあ…」

それでもやつぱり不安だ。

「うーん…あーじゃあさ、聞かせてよー。」

「はあ？ー」

何言つてんだ、穂奈美は？

「だからあんたのギター聞かせてよ。ヒーしろなりに評価するわよ」「いや、でも弾く場所無いし」「私の家があるわよ！」「男を呼ぶのはマズイだろ？」「あんたヘタレだから大丈夫！」
「でも…」「つべこべゆーな！」「…はい」

押し切られた。これは将来かかあ天下築くね。

…何よ、心配してるほどじゃないわよ。普通に上手いじゃない。

「大丈夫じゃないかしら？」

「でもなあ…何か足りない」

「それなら足りないなりに何かしてみたらどうかしら？」

「こればっかりは本人しか分からぬだろうね。
私には分からないこと。

「ありがとうな。帰るわ」

「あつ…夕飯食べて行きなさいよ」

「え、悪いし良いよ」

「別に気にしないから平氣よ。それより、ね？」

「どうしてだらう。ドキドキして何か帰つて欲しくなかつた。

少年少女の会合（後書き）

感想をお待ちしております。

カラオケでの惨劇（前書き）

「へーと…話が伸びてる…下手すれば120話やつやつです。

カラオケでの惨劇

「…え、来週体育祭？」

朝一番、幸平に体育祭が来週に有る事を聞いた。

「うん、ほら学年通信の日程にも書かれてるよ。」

「…知らんかった…」

俺はそういうプリント捨てるからなあ…提出プリント以外捨ててしまう。それだから中学時代によく失態を犯したんだが…まあ良いや。

「んで…種田決めとかやらんの?」

「いやまあ…昨日のH.Rで今日に決めるって言つてたよね?」

「知らん!」

「え、ばらないで!」

呆れ顔の親友。ごめん、次からは気をつけろから…

自身は無いがな!

実を言うと体育祭面倒くさい。だつて埃っぽいし砂埃凄まじいし暑いし。

「芳樹ー！」

「うん？」

色々考へてると穂奈美が廊下に立つてた。銀央さんも居る。

「よう…翔一呼ぼうか？」

「はい。お願ひします」

「おい、翔一！銀央さんだ！」

「あいよ、今行く！」

言い忘れたが今は放課後。朝言つてた体育祭の種目決めはした。すんなり決まつたから楽だつた。

別に司会進行役では無かつたが。

「ねえ、駅前のカラオケ行かない？ 緋奈と話してたんだけどね」

「ん、構わんよ。つか、行かねえと…」

「? 何ですか、翔一くん？」

「…ナンデモアリマセン」

成る程、尻に敷かれるとはこいつ事か。でも、尻に敷かれた方が生活は安泰らしいな。

「…シクシク」

「ありま」

心に思つた事をそのまま口にしたら泣き出す翔一。…すまん。

「で、芳樹はどいつもく。」

「口上と振り返つてこちらを見てきた。その表情に田を見開いたけど…」
「…はれてはなによな？」

「あ、ああ…うん、行くよ」

「よつしゃー因みに真琴たちは行かないから」

「え、何かあるのかな？」

俺は深く考えないで学校を後にした。

で、駅前のカラオケに着いた。平日だからやけに空いてる。

「…はい、4人です。フリータイムで…はい」

今、穂奈美が部屋を取つてたため俺達は少し手持ち無沙汰だ。こいつ
いつ時つて少し暇になるよな。

「…翔一…どうしてそんなに汗が…？」

「いや…お前、緋奈が歌う時に耳塞げ」

「へ、何で？」

いやと言つておきながら翔一は耳打ちをしてきた。内緒、」とつての
は鈍く無いし分かる。

「良いから、塞いけ。悪い」とは言わねえ

「何だか知らんが…」了解

とりあえず、翔一の意向に従う事にした。

「ほら、何内緒話ししてんの？早くしてよ

「あ、ああ今行く」

いつの間にか取り終えたのだろう。穂奈美は早くしろと言わんばかりに腰に手を当てていた。

カラオケでも歌うものは限られてる。ミーハーな曲は勿論、Freddyの曲を歌う。それなりにCMにタイアップされてるから分かる曲も多いだろう。

と言つても、ロック以外そんなにわからなかつたりする。後はクラシックぐらいだが…どう歌えと。

「じゃあ、取つた人から歌おうか？」

「え、良いわよ。芳樹歌いなさいよ。最後で良いわよ」

「え、いいよ。翔一は？」

「いや、先に歌ってくれ」

カラオケでよく起こりがちなのは誰が先に歌うか。日本人って遠慮がちだから先を譲ろうとする。…え、そんな事ない？

「しようがない、じゃんけんにするわよ。勝つた人から時計回りね

「了解ー」

「最初はグー、じゃんけん…」

翔一が先になつた。翔一 僕 穂奈美 銀央さんの順番だ。これで座席順は想像できるかな？翔一の右隣に俺。翔一の左隣は銀央さん。銀央さんの左隣は穂奈美… つて感じだな。

「じゃあ、行つきまーす！」

翔一が歌い出した…曲は…校歌？！何でカラオケに入ってるんだよ…

「ふう…終わつたぜ、はいマイク

「ああ…てか、何で校歌がカラオケに入つてんだよ…」

「え、古くからある学校は入つてるらしいよ…」

「なんだと…」

初耳だ。お経が入つてるのは知つてんだが…

「それより、ほら」

「へーへー…」

予約してた曲が再生される。うん、カラオケつて実際に聞いてると音全然違うから分からない時が有る。今回もそのパターンだ。まあ、慣れたけどもあ。

「へー…芳樹 Freedom好きなんだ」

「へえ、知つてるんだ」

穂奈美にマイクを渡しながら聞く。

「まあ、それなりにはね。詳しくは知らないわ

「CD貸してやるつか？」

「そうだね、貸してくれるかしら？」

「明日な」

了解と言つと穂奈美も歌い出した。最近流行りのアイドルグループの曲だ。実はそんなに聞いた事無いから楽しかつたりする。あまり流行りには乗りたくないのだ。

「ふう…じゃあ次は緋奈ね」

「はい、頑張ります！」

といい、歌い出す。つて、あれ。耳塞いだ方がいいんだっけ？

「… ¥ = メ」

「げえ！」

何と言つが、声が高い！マイクがハウリング起にしてる！そして歌詞が聞き取れない！どんな声だ！翔一は耳を塞いでも顔を顰めてる。余裕が無い俺と穂奈美はそんな事をできる余裕がない。

「だから言つただろ俺はこのハイハイソプラノが嫌だから耳を塞げつて言つた訳でだから忠告したのにつて何でお前は腕を掴むお前も巻き添えだつて何でだそんなに力いれんな俺を巻き添えにするなやめーろうわああああああ！」

とりあえず、癪なんで翔一も巻き添えだ。この瞬間、苦しんでる翔一を見て心から充実感がしたのはきっと氣のせいであると願いたい。

そんな体育祭一週間前の出来事であった。

カラオケでの惨劇（後書き）

校歌がカラオケにあるという話ですが…これは昔からある由緒正しい学校だけあるそうです。

全部が全部あるわけではないそう。

まあ、I-JEではそんなの無視します。

体育祭（前書き）

想像以上に長くなつてます。
二つに分ける事にしました。

一週間経ち待ちに待たない体育祭の日。砂埃の立ち込める校庭にイスを持たされ体育着に着替えて頭には青のハチマキ。これがクラスの判別する材料だ。

「せつて…嫌だなあ…」
「いきなり?…」

ツツコミを入れる幸平。それと苦笑をする翔一。

幸平は楽しみですと言わんばかりに二コ二コしている。翔一は…よく分からぬけど恐りくワクワクしてるだろ?。

「へへ、頑張るつな」

訂正。ここつもわうとう楽しみにしてる。前日とかは普通だけれども当日にテンションMAXの奴なパターン…いや、無いが。

「はいはい…ギリにならない程度に頑張りますよ」
「一位取るつよー」
「ええー…」

テンションが違うすぎる俺たち。

時は過ぎ場所は…過ぎない。さっきまで開会式だったのだ。校長がふざけたおして「オスプレーをしてきたのは意外だつた。そのおかげで誰か一人倒れたらしい。さつき救急車が搬送してゐるのを見た。これで中止にならないかと思つたけど続行するらし!。ちつ

「芳樹：お前から黒いオーラ出でるぞ?」

「早くおわらねえかなあ…」

「どうしたの?」

穂奈美か…あいつは赤のリボンだ。つまり敵チーム。赤尾穂奈美だから赤色か。なるほど。

因みにだが、学年毎に三色に別れている。俺たちの学校は6クラスあるので一色につき1学年につき2クラス、計6クラスで一つのチームが作られてる計算だ。

「よつ、どうした?」

閑話休題。それよりも穂奈美だ。

「いや、芳樹つて行事とか盛り上がらないタイプ?」「違うけど…今回は異様に盛り上がらないんだ」

とにかく早く終わつて欲しい」ということしか頭にない。でも、そのうち熱狂して応援してそうで嫌だなあ…何か現金なやつっぽくて。

「きつとね、芳樹は照れてはつちやけられないだけなんだよ

「おい、幸平。変な事を吹聴するな」

「へえ、なんだ」

「ほらそこも理解したような顔しない!」

「ええ～…」

「ええ～…じゃないー！」

「は～いやー？」

「は～いやー？…違つからー！」

招き猫みたいなポーズを取つて「可愛いとは思わねえー！」

「かんなち…らのきせ？」

「最早、何言つてるか分からねえよ…」

「そうみ、確か芳樹が何に出るか聞きにきたんだわ」

「え、忘れてたんか？！」

「うん」

わつかの変な応酬は置いといて…確か俺は…

「棒倒しとコレーー」

400持久走はどつだか分からぬけど棒倒しはメジャーだよな。

「へえ…応援したげるから私は応援合戦と借り物競争出るけど応援ヨロシク…じゃあね！」

「おー、お前は味方応援しろよーそれと…」

「行つちひつたよ?」

はあ……じょうがないそれなりに応援してやるか…

白熱した棒倒しは終わった。何か肘に当たつて歯が折れた奴が居る
らしく保健室に緊急搬送されてた。俺も…何かテンション上がつて

しました。

そして昼食を取り午後の部。

初めは応援合戦なので穂奈美の勇姿でも見てやるかと思いそれなりにワクワクしながら待つてるとチアの服を着た赤組女子たち。穂奈美も居る。

「て、ええ？！」

周囲もびっくり。翔一も緋奈さんを見つけてびっくり。幸平は…眞琴さんに田潰しられてる。憐れ。

「ちよ、何だよアレは…」

「何でしうね…」

俺たちは一、二、三、四が止まらなかつた。女の子達が前で笑顔で踊つてるし服が薄いから…なのでちょっと一、二、三、四が止まらない。

すると翔一はいきなり責めた。

「どうしたんだ？」

「緋奈が…いや、何でもない」

そこまで言わると気になるのが性だが、震え方が尋常じゃないからスルーする。ギャグではない。

しかし、さつきからどうしても穂奈美を探してしまつ。あいつの踊りだけ俺には映えて見えた。

「やあ、芳樹くん」

「ヤーヤーヤーヤーヤ。盛大な二ヤけつりをしながら穂奈美さんが来ました。悪魔にしか見えない俺。

「はい、これ」

手渡されたのはさつさつ使つてたチアの衣装だ。どうしりと？

「好きにじでいいから預かってー！私これから借り物あるから持つてー！」

「あつ、ちよつとおい！」

行つてしまつた。さつきから人の話を聞かない穂奈美。

「俺なら匂い嗅ぐぞ？」

「そんな変態チックな趣味は持ち合わせてないわ」

「それが緋奈のだったら…あ」

翔一の後ろに銀央さん。メアリーさんみたいなフレーズだな。

「そんなに私が欲しいならあげますよ、ほらー！」

「ちよまチアの衣装渡すなそしていきなり体育着を脱ぎ出すなさつきのそういうみじやねえからつか芳樹笑つてないで助けるよ幸平逃げるなえ次が出番ならしじうがないつか緋奈泣いてるしあーちくしうー！」

とりあえず、落ち着け翔一。

グラウンドを見ると借り物競争が始まるところだった。危ない見逃す所だった。入場門から退場門まで対角に走りその途中にある紙にしていされたものをもってくるルールだ。

おっと、スタートの合図だ。

穂奈美は周りと同じくらいに紙に辿り着き指示を見て愕然とした。どんな無茶だったのだろうか？

他の人はそれぞれ指定されたモノを取りに行つてゐる。

「すみません、腕時計ありますかー？」

とか普通だと思える事や

「彼氏だつてえ？！居るか、ちくしょー！」

あちらではお題は彼氏だそうな。居ない場合どうすれば良いんだろうな。失格？

彼氏が居ないから失格つて……不憫……

穂奈美は紙を見て悩んだ顔をするところに来た。

「芳樹、着いて来て？」

「え、ああ……」

何だか分からないが着いて行く。これつて自分のクラスを裏切つてるような感じもするのだが……皆はそこまで考えてないのだろうか？

色々と思索してゐうちにゴールに着いた。一着だ。因みに一着はさ

つきの腕時計の人。あれが一番簡単だつたらしいからな。

「はい、紙をください」

「え、あ、どうぞ」

紙を役員に手渡す。そいつは普通に紙の内容を読み上げた。

「はい、『一番仲が良い異性』はこの方であつてますね？」

「はい」

…ナシダツテ？ナカガイイセイ？仲買制？ちゅうばいせいじやなくて？そんな制度は無いがな。

「はい、結構です。お疲れ様でした」

「はい…芳樹、帰つていいわよ」

「ちょっと…待てよ」

とりあえず、穂奈美を引き止める。説明を求む！

「さつきのはじうこう事だ？！」

「だから言つたじやない。一番仲が良い異性の人つて

仲買制じゃなくて仲が良い異性。

「じゃあ、ね！」

手を振つて穂奈美は帰つて行く。一番仲が良いって事は…いや違うか。

頭に浮かんだ煩惱を振り払い次に男子借り物にでる幸平の応援に行

く事にした。

アレ、体育祭楽しんでない？

体育祭の収斂（前書き）

最新話から来た方へ。

前話の続きとなりますので一つ戻つてください。

どうやら男子の借り物競争も同じ様な感じになりそうだ。

さつき女子で使ってた紙をそのままにしてある。つまりは：そういう系の指示が沢山眠ってるのだろう。

あれ、内容によつては「ゴールできないらしい。恋人が居ないのに恋人とか。

体育祭実行委員が俺らに喧嘩をふつかけてるしか考えられない。

「幸平、頑張れー！」

真琴さんの応援だ。周りが五月蠅いから声援とか聞こえないはずだが…幸平はこつちを振り返り手を振った。

真琴さんがキヤーとか言つてるが俺としてはよく聞こえたなとしか言ひようがない。

真琴さん限定地獄耳か？

また考え込んでるうちにスタートしていた。何がどうでもいい事に考え込む事が多くなつた気がする。

さて、またお題がハチャメチャらしくタバコ貸せだのビールは無いかだの教師のカツラだの。叫びまくつてるからこつちまでだだ漏れだ。

幸平はまたしてもこつちにきた。…好きな同性とか勘弁な。こつら一体を薔薇色にしたかねえぞ。

「真琴、着いてきて！」

「は～い」

良かった。一部にしか受けないような展開にならないで。でもお題はなんだろうか？幼馴染？仲が良い異性とか？

「なーんか、ラブラブだなあ…」

「それは周知だ。翔一」

呆れ半分、からかい半分の笑みを浮かべる翔一。どうでもいいが幸平はお姉様方に人気があつたりする。曰く、『守つてあげて安心したところを襲いかかりたい！』だそうで。この先輩は…まあそのうち紹介するよ。

ゴールに着くと役員が紙を読み上げてる。
するところからでも認識でぐらいに真っ赤になつてた。
どうこうのだろうか。気にならない訳が無い。

いきなり泣き出した真琴さんと真っ赤な幸平。異様な光景だ。

「ただいまー！」

「どんなお題だつたんだ？！」

「私も気になるー！」

「私もですわ！」

どこからか穂奈美と銀央さんが駆けつけてきた。あ、一箇所しかないね。

何か乙女センサーにでもかかつたのか。目がキラキラしてる。どこの少女マンガだ。

「えっとね…『好きな人』だって…」

「つむづむ…」

変な声をあげてしまった。周りの穂奈美と銀央さん、それとクラスの女子どもはキャーキャー言つてゐる。いつも忘れてるのだがこいつらまだラバーズじゃないからな。

「ようやく結ばれるね！」

「え、あ、う、うん」

「うわあああああ…」

祝福するクラスメイト。照れる真琴さん。悲鳴を上げるクラス男子一名。あ、幸平もだ。羞恥で悲鳴をあげてゐるのだろうな。

「で、幸平？ どうするんだ？」

「どうするつて？」

「だつてよお、ここまでしどつて放置するのはどうかと思つせ？？」

口を挟む翔一。俺ら二人は幸平をいじる事にした。観客付きで。

「ああ、うん…後で屋上に呼び出して有るから」

最後は2人にしか分からぬように耳打ちをしてきた。

「そつか。後はお前の言葉で言つだけだ。頑張れよ？」

「うん…」

照れて返事する幸平。この後、たちこラブラブ度が上がるのは言つまでも無いだろう。

とつあえず、他でやつてもうつ救済措置を取らなければならぬこと思ひ。

そして、俺の出番。400mリレーだ。1人100m。俺以外に翔一と陸上部のやつ。

何で陸上部と混ぜるのが文句を言つたのだが同じぐらいのタイムらしい。因みに早いもの順に並べたので陸上部A 翔一 俺 陸上部Bの順番になる。

陸上部曰く軽くストレッチしたほうが良いらしい、する事にした。

「なあ、芳樹？」

「何だ？」

前に動画サイトで見た手足の深呼吸をしていたところ話しかけられた。あいづは足を下げながら足の上げ下げ運動をしている。

あいつもある動画見たな。

「何や感や言つて体育祭楽しんでるだろ?」

「言ひな。数時間前の自分を今ボコボコにしてる最中だから

怠いとか言いながら楽しんでる俺。所謂、結構単純。

「まあ、最後だし頑張ろつや」

「あ

パンッと乾いた音が響いた瞬間、静寂から喧騒になった。

今は陸上部A…？美川つてやつだ。早いのだろうけど…それ以外の奴がいかんせん早い。野球部やらサッカー部が混ざってる。

「おーい、？美川！ラストだあ！」

翔一の大声が聞こえてくる。あいつも張り切つてなんあ…と呑気に考えると翔一にバトンが渡つてた。銀央さんに声援でも受けたのか知らないが急激に早くなつた。

「おら、翔一。ペース落とすなよ！」

翔一がやつた事を俺も真似して見た。俺もそろそろ準備を始める。靴紐は解けてねえな。大丈夫だ。

「ラストおー！」

最後の直線。バトンをもううべく腕を後ろに突き出す。

…今だ！

俺は徐々に走り出しこの感じに加速し出した時にバトンが渡された。

少ししてカーブ。前に1人…後ろには…いや、もう横にいる？！足が重くなつてゐるのを感じながら離されない様に力を入れる。

「芳樹ー！頑張りなさいーー！」

どこからか穂奈美の声援が聞こえる。どうしてか少し楽になつて隣の奴を抜かす。

最後の直線。最後は…確かに風見だ。早くしおと言わんばかりにチラ
チラ」」つむを見ている。

「風見！」

「俺は風鳥だ！」

そんな声が聞こえたがそれ以外じゃない。春なのに暑い…

風見が「ゴールテープを切り喜んでるクラスメイトを見て一位になつた事が分かった。

放課後…告白するからと立つ幸平を置いて俺と穂奈美は帰つてた。

俺たちは学年一番。全校で8番と言つなかなか成績だった。楽しかつたから良かつた。

「お疲れ様。体痛い？」

「そりやそりや…」

全身から悲鳴を上げてる。歩く度に太ももが…

「私が全身隈なくマッサージしてあげようか?アフターケア付きで」

ハートマークがつきそいで妖艶な笑みを浮かべてこつこつと迫つてきた。

「う、そ…」

「…ひくじゅつ」

こんな感じで俺の体育祭は終わった。

体育祭の収斂（後書き）

体育祭は終了。

でも砂埃って本当に凄いですよね。

風の日とかだったら最悪…

少女の取り扱い注意報

体育祭明けて次の日の午後1時。俺、翔一、龍、真汰で痛い体を引きずつてスタジオに行っていた。

真汰はドラムだから体力が必要だとか言って毎日走りこみはしてゐため筋肉痛にはなつていないが俺と翔一と龍が酷かった。

俺はまず足が痛くて立つてられないためイスを使う。そして何故か腕も痛くて動かし続ける事ができない。

翔一は足が痛いと俺と同じ症状のためイスにボスンと座る。龍は応援で声がガラガラだと。フルセットが出ないらしい。

なのでやつた曲を分割して練習する事にした。

「くつそ、ペダル操作だけで痛いぞ…」

「俺はベースで良かつたわ…」

「本当、お前ら体力ねえな」

一つ一つに痛々しい行動をする俺らに呆れ顔の真汰。
くつそ、お前は良いな！

「ねえ、何で俺は立つてゐのかなー？」

そう言つてくる龍。イスは二つしか無かつたから我先にと言つ感じでイスを取つた結果龍が余つた。

「一応、俺も筋肉痛有るからね？」
「さつき言つてなかつたじやん」

喉が痛いしか聞いてないよ。足が痛いなんて一言も聞いてない。

「おし、セッティング終わつたし始めるぞーー！」

「え、ちょっと！俺、死んじやう！」

「大丈夫だ！運動部なら普通だからー！」

「何なんだよーー！」

知るかという感じに演奏を始めた。右腕も痛えな。手首だけ動かそ
う。

途中休憩、俺は外にジュースを買いに出ていた。中は飲食禁止な
だ。だから、外に出て飲むしかない。機材とかに零したら賠償金払
わねばならんからね。

外で「一ラを買いフルタブを引こうとする手の中から缶が消えた。
消えた方向を見ると穂奈美が立つてた。

「何してるんだ？！」

「いや、喉乾いたから」

「自分の買おうぜ？」

穂奈美の手には120円。買うために出てきたんだな。

「良いじゃない。ケチケチしないでよ…はい、返すわ」

「これって…」

「早く飲まないと氣が抜けるわよ？」

いや、飲んだら間接キスじゃね？穂奈美はそんな事を気にしない人
なのか？少しへキドキする。

が、気にしない人なら俺も飲んじまう。「あそつさま。

「はい、私のアクエリも一口あげるわよ」

「…ありがと」

ドキドキしつぱなしです。異性と物体を関して接觸をしてゐるのドキドキしてゐるわけで別に穂奈美にドキドキはしていな…筈だ。やばい、ゲットでそうだ。うつぶ。

「ふう、生き返る…喉が痛くて歌えないのよ」

「ああ、今日練習だつたのね」

「うん、初練習になるのかな?何回か顔は合わせてるんだけどね」

たまたまドッキングしてしまったのだろう。少しどバンド間で交流が生まれるとなかなか嬉しかったりする。

同じような思考を持つてたり全然世界観が違つやつも居るからな。

「休憩時間終わりだし…戻るな

「うん、じゃあね。後で」

聞き返したかつたが龍に呼ばれたから聞きそびれた。
痛い足を持ち上げてスタジオに入る。

「じゃあ、新しい方練習始めよつか

ただし分けて練習な、と真汰は付け加えた。正直ありがたい。

「おし、じゃあ芳樹の最初のフレーズから入るから翔一は測つて入れよー。じゃあ、行くぜー！」

カンカンカン。ドラムステイックでカウントを取り始める。

わざとより腕は不思議と痛くなかった。

スタジオを片付けて外に出る。すると穂奈美がいた。

「マイク買いたいから楽器屋に着いてきてー。」

と了承すると近場にある大型ショッピングモールの楽器屋に連れていかれた。

時刻は午後4時50分。4時30分にスタジオから出てきて20分で着いた。

歩いてる間、バンドの事や学校の事を話してた。足に痛みはなかった。

楽器屋に着くとすぐさまマイク売り場に直行。安いのから5万円ぐらいまでのを取り扱ってる。

楽器を本格的に買つなら東京に行くしかないが今日は流石に時間がない。

「ねえ、似合ひつい？」

「似合つもなにも使いやすさだぞ」「

星とかがペイントされてるマイクを歌う感じに口元に持つていていた。似合つっちゃ似合つ。女性ロック歌手みたいな感じだ。

「…でもこれ気に入つたなあ…」

「一回歌わせて貰えよ」

「恥ずかしくない？」

恥ずかしいも何も、ギターを買つ時も衆人觀衆がいるなかで一回は

弾くのだ。

「そんな事を言わずに…すみません！」

店員がやつてきて一回マイクを試したいの^三を伝えて歌つてもひつ
事にした。

女の子がそんな事を口にするんじゃありません！

ともかく色々あつてマイクは置いた。

「ふふ… ありがとうね」

一
あ
あ
：

どうこう読か、ここにマイクを置つてあげた。
何でだろうな？

その後、奢ると言つて譲らなかつた穂奈美とファミレスで夕飯を取り、帰路につく。

「じゃあね、芳樹。送つてくれてありがとう。」

——ああ、また明日な

「え、マジ?」

知らなかつた。携帯を開くと土曜日の文字があつた。

「ふふつ、バカねえ。お休み！」

手を振つて家に帰つて行く。

自宅への帰路がいつもより長く感じた。

少女の取り扱い注意報（後書き）

ファルセット…裏声
です。

龍くんは影ながらの苦労者です。

季節も夏に入りしてもう学期末だ。

学期末…と言う事で定期テストがある。体育祭が中途半端な時期にあつたらしく中間テストはなくなつてゐるらしい。ここ10年くらいそつららしい。中間テストが無い分遊べたし楽しかつたのだが…これ一回で一学期の成績が付く事になる。なので、テストをしぐじると夏休み補修コースに強制参加させられる。

教師には悪いがそれだけは断固拒否したいが為に1ヶ月前から「ツコツ」と始めてた。

そして今日。俺は少し寝不足だつた。どうにちも買つてきたゲームにはまつて昼はギターと学業。夜はゲームという不健康極まりない生活を送つており、金曜日から今朝にかけてほとんど寝ていな。多分3時間程度だ。

なので、フラフラ教室に辿り着き速攻爆睡。HRが始まつた時に前の席の？美川に叩き起された。テスト一週間前らしく範囲が配られていた。

「ちよつと待てよー。120ページ近くあるんだからー。」
「一学期分のワーク全部やるのかよー。」

阿鼻叫喚… まではいかないが皆いい感じに悲鳴をあげている。
ちょっと優越感。

少し前から勉強はしていた。ワーク類は全て終わらせていく。やるの面倒くさいからね。

そうして賑やかで騒がしい朝は過ぎて行った。

2時間目の体育でちょっとした事件があった。バスケをしていたのだが俺はバスされたボールを受け取りそこね顔面強打。急遽保健室に運ばれる事になった。

なので俺は今、保健室のベッドの上だ。クーラーがついてて涼しい。少し目が痛いしクラクラする。多分、寝不足の後遺症か？

あまり考える事はしないで寝る事にする。おやすみ。

気づくと昼食の時間だった。自分の腹は力なく鳴った。

弁当は教室か…と思つて上履きを履こうとすると足元に鞄があつた。弁当も入つてゐる。誰か親切なヤツが届けてくれたのだろう。

「おい、坂上！飯食うならこいつに出て来い！」

俺がガサガサしてゐるのを気づいた妙子先生（妙齡34歳、独身）逆らう要素がないためベッドから出る。うわー、まだフフフフ…

「よつ、元気には…なつてないな、うん」

元気には…の部分で振り返つた妙子先生は俺がフフ…となつてゐるを見て苦笑した。

と言つわけで、『飯タイム。ムシャムシャ。』そんな時でもお腹空くんだな。

食べ終えるとまだ寝てろと言われたため寝る事にする。毎晩に近い

かもな。

おやすみなさい。

次に日が覚めると既に放課後。一時間ほど過ぎていた。
寝過ぎたからか首が痛い。わざと体調は良くないので早々
に帰る事にする。

「おや、坂上。帰るのか？」

「はい、今日はちゃんと寝ますよ

「お前の彼女にでも寝かせてもらいたい？」

「はあ？」

「さつきから休み時間のたびに見てきてくれてるみたい

親父っぽい笑みでニヤニヤと見てくる。とりあえず…

「笑い方気持ち悪いですよ

「まあそういうのな。で、どこまで行ったんだ？」

「はあ？だから何の事…？」

すると保健室のドアがバタンと開けられた。

「先生、芳樹日覚めた？」
「あら、彼女来たわよ？」
「…まあ…」

そういう事か。毎回見にくるからそういう関係だと勘違いをした…と。そんな事実は一切ない。

「ち、違います。」こいつとはそういう関係じゃないです
「あれ…違うのか？でも、あんとき…」
「違います」
「でも…」
「違 い ま す」
「ハイ」

恐ろしいな、穂奈美！

お礼を述べて俺らは保健室を後にする。さて、帰るかなー。

「ねえ、私ずっと見ててあげたんだけど？」

「何がだ？」

わざとすつとほける。多分、休み時間の度に来てたと言つただろう。暇なもんだ。

「だから、私は毎回芳樹の世話を来てたのよ~。」
「ほーう、それはありがとう」
「だからさ…」

モジモジ。何かを求めるような顔でこいつを見てくる。何だ、金をくれってか？

「勉強教えてよー。」

色々、予想外だった。

あの後、別に断る要素が無かつたから『楽にオッケー』と答えてしまつた。

が… そして、後日。勉強会と言う感じで教室に残りやるはずだったんだ

「……何で幸平と真琴さんも？」

あら、いじやなし、多め方が良しかねよ」

「ハラマニハ采」

「あらかじめ、私以外の誰かと困らぬ仕事を持

のかしり、Iの変態」

何でたよ…」「

もう穂奈美はダメだ。ネジが外れかかってる。や、もう外れてるのか？

Г Г Ф- - -!

俺に拒否権はなさそうだった。幸平と真琴と一緒にすると……考えて
くれ。

数刻後、やはりこうなる。

「真琴……当たつてゐ……」

「ワザとだから！ それよか次！」

「集中できないんだけど」

「…私から離れたいの？」

「ああ…もう涙ぐまないの。別に良いよ」

「やつたあ…」

絶対に「うつなると思つてたんだ。穂奈美もげんなりしてゐる。

「これは…予想外だつたわ…」

「だから嫌だつたんだ」

ため息をつく穂奈美。

「なあ、親友」

「何かしら?」

ノリで恥ずかしくなりながらも穂奈美を親友と言つと驚いた顔をしながら返事をしてくれた。

「翔一とかは?」

「あー…えつとねえ」

答え辛そつに目を泳がせる穂奈美。

「えつとね、電話した時に…『あら、穂奈美さんですか。え、勉強会?明日?すみません、私は翔一君と人生のお勉強会が…あらあら逃げ出しましたわ。電話切れますわ』って言われたわ

「…」

「しかも、後ろから翔一が嫌だとかやめるとか」

恐ろしい銀央さん。既に尻に敷かれてる。憐れ、翔一。

「でも、尻に敷かれた方が上手く行くって聞くぞ?」

「あ、それは私も有るわ」

うなづると頷いているとハッとした顔になりジト目で睨む穂奈美。

「もしかして、あんたも敷かれたいタイプ?」

「いや、俺は敷くタイプかな。」

「あら、マゾかと思つたんだけど……」

「……違うがな。俺はいじめる方だな」

「あんた、一生独身でいて」

「何でだよ?..」

呆れ顔で言われると俺泣くぞ!-

「だつて、あんた奥さんとかにロバしちつだしち……」

「しません!」

思わず敬語。

「ふう、そんな事よりさつさと勉強するが

「はこねー

と言いつシャーペンをノックする。隣を見ると……うさ。見たくない。

「なあ、あこいつら置いておいて勉強を続けた。

「やうね

あこいつら置いておいて勉強を続けた。

後日談になるが、俺と穂奈美は中々な手応え。幸平と真琴さんはダメだつたらしい。

翔一達は…凄く良かつたらしい。
何をしてたんだ、あいつら。

テスト明け、俺はとても清々しい気分で登校してた。周りを見るとやはりスッキリしたような顔立ちの人や不安そうな顔の人、そして落ち込んでる龍。…って龍？！

「おい、どうしてそんなに落ち込んでるんだ？」

「おお、芳樹グッモーニン」

「Good Afternoon.」

「まだ朝だが…」

「これはそんな意味じゃない。とりあえず、辞書引け。まあ、面倒なので去り立つとするときの定引きとめられた、チツ。

「今、心で舌打ちしたよね？…」

「いやいや、気のせいですよ」

「うう…まあ良いや」

そこで引かれてがるか！まあ良い。

「つーわけでバイバイ」

「ええ、ちょっと…」

「何だよ」

あえて不機嫌そうに返す。意外といじると楽しい龍くん。

「いや、あのな？俺、赤点疑惑なんだよ」

「…マジで？」

「大マジ」

ふうとため息をつく龍。前にも話したが補修の強制参加となる。憐めなり。

「まあ…自業自得だ。頑張れよ」

「…そういや、うちのクラスの赤尾に勉強教えてたんだってな?」

「うん、それが?」

「他の男子ども羨ましがつてたぜ?」

「俺に? 穂奈美に?」

「アホンダラ。お前に決まつてらあ」

まあ分からなくはないな。あいつと居ると不思議と落ち着くし…甘い匂いするし。

でも、あいつをそういう…恋愛感情? みたいな目で見てないぞ? 何回か不意打ちでドキドキさせられたがな。

「ふーん…」

「ふーん…つて…まあ、そつまつ所気にしないのはお前らしい一か

下駄箱に差し掛かるとバイバイと言つて靴を履き替える。どうでもいいけど、中3の時に上履きに蜂が潜んでて履いたらグサリ…と刺された事がある。

あれは年甲斐も無く涙を流しそうになつた。

後で理科の教員に聞いたんだが、恐らく暖かい所を求めたら上履きにと言うものが有つたから入つたんだろう…だそうだ。

何て傍迷惑な…と思つけど、実際に傍迷惑な存在は人間だろつな。

うだうだと考えながら教室に入った。そういう、スズメバチ…

「おはよー、芳樹」

「スズメバチ…あ、おはよー」

思わず心で思つてた事を口にしてしまつた。よくある…かな?

「何でスズメバチなのかしら?」

「色々とあつてスズメバチと言つ思考に辿り着いた」

「…元は何を考えたの?」

「確か、上履きかな」

「謎だ!」「

幸平と真琴に呼ばれた。話題の転換とか話してるとよくないか?まあいいやと思つて座席に着く。そーいや、予習してないと思つてノートを開く。

「ん?」

何かノートと共に落ちて来た。これは…手紙?
表には何もない。裏には…果たし状。

「はい、捨てるー」

「つて、芳樹! それラブレターつてやつじやなかつたの?…」

「男からのラブレターなんぞいらねえ!」

「あら、そう言う展開が私の友人に…ああ…」

「真琴さん、完全に腐つてゐよなー?」

ちゅつと見たくない一面を垣間見た。ぐぢゅぐぢゅ系は嫌だからな。

「で、果たし状つてやつに呼ばれなくていいの?」

「やだよ、喧嘩嫌い」

「…ああ、そり

苦笑する幸平。喧嘩は嫌だ。疲れるし事故処理は大変だし歯は折っちゃダメだし。

それよか予習…と考え果たし状は「ミミ箱に投げた。

…おっし、入った。

5時間目の中学生は実験だった。期末後だから面白い実験をしようと言つ事で、水素イオンと酸化イオンをイオン結合させて水分子を作る実験だ。

一回、中学でもやつたな。

今回は大掛かりだ。前はフラスコでやつたが今回は透明バケツに入れてやる。電源装置も相当大きいのを持つてきた。

危ないから生徒ではやらせず教師がやるそうだ。と言つわけ俺達は教卓の周りに集まつてゐる。

「はい、ちゅーもく」

少しテンションが上がつてゐる化学の老竹先生。名のとおりコボコボ…では無く新任だ。

「じゃあ、誰か起爆してくれんか?」

「先生がしてくれんじゃないんですかー?」

「いや、ここはお前らをやらせてあげようかなって」

「じゃあ、俺やつますよ」

心なしか嬉しそうだ。

「おひし、じゅあいのボタンを押してくれよな。耳を閉じるーー」

「俺、片方閉じられなくね？」

「…頑張つてください、翔一くん」

嫌な顔をしてスイッチを握る。そして自分でカウント始めた。
5

ドカーンとかそう言う音がした。翔一がスイッチを押した途端に轟音がしてバケツの中の水が上に吹き上げてきた。

「うつわ、冷た！」

「おいおい！」

一 風邪ひくぞ！？

それからはてんやわんや。脱がそうとする翔一、それを写真に納める女子、さつきの爆発音で飛んでくる校長以下。

波乱万丈な化学の時間だった。

はたまた放課後。ようやく乾いたワイシャツに腕を通した。まだ少し冷たい。

「芳樹？」

廊下には穂奈美が。じりじりしているのかと聞くと

「私、週直だつたから」

「へえ」

「それよつじうしてワイシャツ乱れてるの？…まさか…」

「とりあえず、やましい事はないぞ」

「男と…」

「お前もか！お前もそっち側の人間か！」

「冗談よ、と返されると早く帰るつって言われたから片付けのペースを挙げ早々と帰る事にした。

Good Afternoon! - - - 1 (後書き)

地味にアクセス数が伸びる事を願います。

ちょっと駅前に寄らうと言わされたので穂奈美とよる事にした。

駅前のビル…と言つても殆ど駅ビルなのがバカにしてはいけない。ここでも基本的に揃うものは揃うのだ。

ファッションしかり雑誌しかりコスメしかり食材しかり。流石に家具は売つてない。

実は前にCDを買いに来たんだが…入り組んでて迷つた。今考えればこんな所迷わないのにな。

「ねえねえ…化粧品買つから本屋でも居てよ」

「良いのか?」

「うん、見ててもつまらないだろ?」

「そんな事はなさそうだが…迷惑になりそうだからやめておくよ。

本屋にいるから終わつたら何かしらで教えて」

「うん、じゃまたね」

手を振つて別れる。コスメは2階、本屋は4階。

エスカレーターでも良いんだが運動不足解消の為階段にしよつ。と一階までは意気込んだのだがやはりバテた。

明日から少しずつやるうつと思うね、明日と化け物は出でこないつて言つけどや。

本屋に着くとまずは雑誌コーナー。お気に入りの音楽雑誌があるのだ。

（お、Freedom特集…）

表紙を見ると尊敬してるギタリストのRYOと書つただがピースしているのが見れる。

まだ若手なのにギター界の期待のエースと言われている。

パラパラめくつてみると練習用フレーズと参考DVDが着いていたので買う事にした。帰つたら早速見てみよう。

それだけでは時間が潰せるわけが無いので何となく文庫本を見に行つた。夏だからホラー系でも見てみたい。

色々とコーナーをグルグル回つてると田舎ての本があった。買うか迷つて15分弱。店員にも変な田で見られ始めた気がして来たので買う事にした。

夜にでも読もうかな。

機嫌を良くしながら穂奈美が居ると言われた化粧品店に向かつ。メールも来てないし一応本屋をぐるりと回つて居なかつたから多分まだ選んでいるのだろうと思つていた。

二階に着きある方向に向かつと誰かが男達にちよつかいを出されていた。特に気にせずに通り過ぎようとするヒドンと隣から衝撃を受けた。

「もう一遅いよ、芳樹。私を虐めるのが好きだからって…」

言つておひへ、こいつは穂奈美だ。途中までの会話だとただの恋び…

「おひ、どうこう…」

「良じから口裏合わせて」

「ん…」

分からぬが合わせる事にする。分からなくてあたふたするような
鈍感な神経は持ち合わせてないからな。

「…」めんな、色々あつたんだよ

「またあの女ー？」

「あの女って…妹だろ？」

「おい！」

振り返ると怖い顔の少年達。同じ年ぐらいかな？

「順番があるんだから俺たちが先でいいかなー？」の子、俺らと一緒に
しててくれるらしいから

「その後にイイコトも…だよな？」

ああ、よくあるカスいナンパパターンだ。多分、この後に俺は肩で
もかけられてビビりせるんだろうな。
そりはいくか…

「ほら、穂奈美」

「え、ちょー！」

グイッと手を取ると一気に駆け出した。Good Afternoon
。こ…なんぢやつて。

俺の考えだとここで諦めてくれる予定だった。ところがどつこ。
あこつらは走つて追いかけてきやがつた。

「うひ、待てやー！俺らが取つたんだからこいつちが先だ！」

ほら、ジャイアーズムーつか、走つてゐから考えが無茶苦茶！

「穂奈美、どつちに逃げたら巻ける？…」

「えつあ…次はこつちから入るよ…」

次は穂奈美が先導する。行き先的に…電車のホームか！？電光掲示板を見ると後1分も満たないぐらいで来そうだ。俺は慌ててPastoを取り出し改札をくぐり抜けた。後ろを見るとあいつらもくぐり抜けってきた。

「しつこいのは嫌いよ！」

「ナマ行つてんじゃねえ！さつと俺らに奉仕しやがれ！」

それが本音かよ…走りながらも少し呆れてしまった。

ホームしたの階段に着くと人が溢れかえっていた。多分、電車が付いたのだろう。

人に流されない様に手を強く握り駆け上つた。後ろからは罵声やら怒鳴り声やら、少しでも止まつたら捕まりそうだ。

どうにかホームに着くともう待つてゐる人は乗つていた。慌てて飛び乗つて穂奈美が乗つた瞬間に後ろでドアがしまつた。

…ギリギリセーフ…

少し安心して力が抜けた。ここまでしつこい奴は始めてみた。

「ふふつ、芳樹かっこよかつたよ。逃げたのはどうかと思つけど…」

「あそこで俺に殴り合いでもしろと？」

「うん、結構期待してたんだけねどね」

「…やめてくれ」

喧嘩は嫌いなのだ。

次の駅で折り返して戻ってきた。わざの奴らはもう居ない。

「居ないわよね…？」

「うん、大丈夫そうだな」

「びっくりしたわー」

「君が美人だからじゃないかなー？」

「…目を見て言おひよ」

ふざけて言つてるから！決して恥ずかしいわけじゃないから！

「まあ良いわ、帰ろ？」

「うん…あ」

今頃気がついた。手を握っている。握る部分が暑い。汗がじんわりと…

「うわあ…！」

「どうしたの？…！」

ニヤニヤ。真っ赤になる俺を見て悪い笑みと言つか妖艶な笑みと言
うか。ここつ気づいていたな…！

「あらあ、芳樹。以外と初心ねえ
「やめてください」

恥ずかしくなつてさつさと歩いて帰る事にした。

Good Afternoon - - - 3 (讀書セ)

長い...かな?

次の日、寝たのが10時頃だったから目が覚めたのは5時だった。いつも朝は目覚めたとしてもうだうだしてたりして…まあ朝が弱いわけだ。

お日々ぱっちりと言うわけだから少し部屋の清掃を始めた。俺が住んでるのは一軒家…だけど親はない。いないと言つのも親父が出張して母さんがそれに着いて行つた。俺は高校に受かってもう一度受験し直す気などさらさらなかつたのでここに残る事にした。

まあ一人暮らしさは憧れるが楽なものではない。光熱費とか税金やらなんやは親が支払つてのだが食費とかは自分で賄つてる。だから正直面倒だ。自分で家計簿をつけているようなものだ。

部屋の片付けをすると携帯が振動していた。サブティースクを見ると赤尾穂奈美の名前。開いて見てみると

『おはよう、一緒に行きたいから… そうね8丁目のコンビニに7:30に来てくれるかしら?』

どうやら一緒に登校しようというお誘いメールだった。どうして誘つてくるのかとか何で俺なんだとか色々聞きたい…けど、そこに断る要素は見当たらないので簡潔に『了解』と送つた。

携帯は忘れないようにかけてある制服のポケットに突っ込む。どうにも携帯は忘れる事が多いのだ。多分、あまり重視していないからだろつね。

下に降りてリビングに入る。朝食は軽めに食パン一枚それと命の水

オレンジジュース。愛媛の心が大好きなんだ。みかんみかんみかん、
みかーん。

TVをつけて爽やかそうな司会がニュースを読み上げて次の記事に移ろうとしたときにパンが焼けた。

オープントークから取り出して頬張る。

…うげつ、少し生焼けだった……もう一度焼き直す。その間にオレンジジュースを飲む。ふはー、えめえ。

チンと甲高い音がしてパンを取つて食べると良い感じにサクッとしてた。

食べ終えて時計を見ると7時を少し回っていた。8丁目のコンビニは大体10分ぐらいだからもう少しのんびりしてよ。

TVに意識を向けると本日の占いとやらがやってた。特に占いとかは気にしない質だからいつもは見ないんだが何となく見る気になつた。8月2日生まれだから獅子座だ。

「獅子座のあなたは本日はちょっとしたトラブルに巻き込まれるでしょう。ただ、そのトラブルの中にちょっとしたハプニングで嬉しい事があるかも?」ラッキーカラーは黒ですー続いて乙女座のあなた…」

ハプニングねえ…車に突っ込まれるとか?いや、コンビニ強盗、神様が狼に乗つて突進…非現実的すぎるか。非現実を求める桒木くんじゃないんだから…

うだうだしてると鞄にノートやら突つ込んで気に気づいたので自室に戻り鞄に突つ込んだ。今日は主要5科目あるから重くなつてる。時間割を考えた担任を殴りたい。

戸締りをしてガスの元栓を確認して家を出た。多分、ちゅうじ良いくらいにコンビニに着くくらいかな。

夏にしてはまだ涼しい朝の住宅街を歩く。
ちゅうじすると呼び出したあの子は雑誌を立ち読みしてた。表紙から見るとファッショングラビア雑誌当たりだらう。
しばらく見てるとちゅうじやく穂奈美も気がついた。

「よつ、ねーちゃん。俺と一緒に学校行かねーか？」

「ふふ、そうね。学校に行く間私を守ってくれるナイトならお願ひするわ」

「そりゃ光榮だ」

軽口は軽口で返される。多分、昨日の事があつたから保身のために呼んだのだろうか？

まあ昨日の奴はしつこかつた。流石に学校まで追いかけてはこないだろうけど…念のためだ。

「では、向かいましょうかお嬢様？」

「宜しくてよ」

主従関係がこの瞬間だけ成り立つた。しかし、数秒後崩される。

「…やっぱ、芳樹その顔最高…あははっ…」

笑出しあがつた。何か真面目（？）にナイトを演じたのに損した気分だ。

「…こつまで笑うんだよう…」

ついには腹を抱えて笑いだした。俺は少し涙目。周りの人は特異な俺達を見て変な目で見ていく。

「あははは……もう笑わな……ふくふく……」

「笑ってるだろ?！」

「だつて、真面目な顔で……くくく……おかしな事を言つんだもん」

「置いてくぞ、お転婆姫」

「くくく……私を置いて行くの?音楽家ナイト様?」

暑さで少し俺らの頭がイカれてるようだ。せつやと学校で涼むとしよう。

昼休み、俺は暑さで茹だつてた。近くの高校だとクーラー完備なのだがウチは職員室、保健室、図書室、体育教官室にしかない。体育教官室に着いてるのは炎天下の中体育教師は何度も直射日光を浴びるから熱中症にならないように……らしい。

「よつ……芳樹。抱きついていいか?」

「むさ苦しいからやめてくれ……」

翔一はパタパタ下敷きを仰いでる。少し風がこっちにきて涼しい。そいや地球温暖化つて周期的に起こってるらしいねー。一酸化炭素が原因じゃなかつたらそのうち寒い地球寒冷化するかもねー……と翔一に言つと「頭がショートする……」とか言つて倒れた。ああ……

扇風機……

「やつほー、芳樹……あれ死んでる。みんなも?」

みんなたてのは幸平、真琴さん、翔一を混ぜての事だらう。幸平はワイシャツをズボンから出して真琴さんはボタンを開けてるのだが……色っぽい。多分、幸平へのアピールだらうが回りの視線を確保して幸平は見向きもしてない。翔一は言わずもがな。

「そんな君たちに冷えたジュースはいかが?」

「……え?」

穂奈美の手元を見るとジュース。わざわざ校内から抜け出して買ってきてくれたらしい。

「ありがとな……ふう、生き返る」

喉を通る感覚が気持ちいい。回りの面々も目に活気が戻った。飲み終えて昼休みが残り5分になつた時に事件が起きた。

「ねえ、ニース! 他校の人間が校内に侵入したつて!」「ええ? !」

持つてきたのは委員長の長谷川さん反応をしたのは? 美川くん。侵入者つてどう言つ事だ?

「何にも人探しらしよ」「へえ……ま、俺らには関係ないか」「そうだな。あー、翔一下敷き半分くれえ……」「これを割れと? !」「

いつも通りに戻れるはずだつたが戻れなかつた。

「はい、失礼するぜえ……さつて居るかなあ……」

体をビクッとしてしまった。昨日追いかけてきた奴らだ。ここまで追いかけて来たのか…？制服から学校を暴いたんだろう…

（バレるかなあ…？）
(多分…)

がつづり顔を見られてる。多分、つかかられるだろつ。

「はい、次はつ…いたいた。昨日の子だあ…」

「ははつ、居たなあ！」

「ヤーヤと近寄つてくる2人。ふと様子を見ると廊下には後3人は居る。厄介だなあ…」

「ねえ、俺たちあの後女の子探すの大変だつたんだよお？」

「そつだぜえ、歩いてる奴に学校を優しく聞いてなあ…フレンドリーに教えてくれたぜ？」

「だからさ…俺達と来いよ。このダメそうな彼氏より満足させられるぜえ？」

「後、そのワイシャツをはだけさせたる女もだ。不満なんだろつ？俺達が解消してやるからよ…」

「その代わり壊れちまうかもしけないけどねー…」

「くははははー！」

何か不良高校にありそうなセリフを聞かされて笑いそうにな。翔一は必死に笑いを堪えてる。

「だからさ…そこの彼氏ども来いよ。一緒にじょりせーっ！」
「悪いけど、嫌よー！」

「最高の彼氏を裏切つてあなた達の所に行きたくないわ！帰つて！」
幸平はビックリしている。

「最高の彼氏を裏切つてあなた達の所に行きたくないわ！帰つて！」

「ちよつ！俺、あんたとそんなん…！」

「…ああん？」

すると腕を振りかぶるモーションが見えたので思考を中断して咄嗟に間にに入る。

…ぐつ！

思いつきり腹を殴られた。さつき食べたものが出来そうになるがこらえる。その時になつてようやく現実が迫りついたらしく回りからは慌ただしく動き始める。外にいた奴らも中に入つてきた。これつて

…1：6？

「良い気になつてんじゃねえ！俺らは親切で下手に出てやつてるのに何だその態度は！いいからさつさと来やがれ！お前もだ…」

「やめて…」
「いやつ…」

グイッと穂奈美と真琴さんを引っ張る。すると引っ張りすぎたのか穂奈美のワイヤーシャツがビリリと裂け始めた。

「いやあ…」

黒い。…すると奴らは動きを止めて一瞬だけそひひに集中した。

「今だ！」

リーダー格の奴に思い切りドロップキック。後ろにいた奴も巻き込んで机にぶつかった。

「…のやうう！」

奴らの1人が何処からか警棒を取り出して来て頭を思いっきり殴られて床に沈む。頭が割れそうで視界が赤い。

「おい、芳樹…らあ…」

翔一は近くにいた奴を沈めてた。幸平は何時の間にか真琴さんを助けてた。

回りのクラスメイトの1人が先生を呼んでくる！と叫んで走つて行つた。

奴らが翔一と幸平によつて沈められた瞬間、安心して意識を手放した。

最後見た映像は穂奈美が何かを叫んでる姿だった。

目が覚めるとカーテンに仕切られた部屋……保健室かな？多分、保健室にいた。病室ではなさそうだ。

体を起こそうとすると頭がズキンと痛んだ。

触れてみるとグルグル巻かれた包帯。ああ、そうか。警棒で殴られたんだつけ？ベッドから降りてカーテンを開けると妙子先生が事務をしてたらしい。今は顔を上げてこっちを見てる。

「お、坂上起きたな。よく来るよなあ……」

「……頭は脳震盪ですか？」

「まあそうだ。命に別状無いから安心しそう」

「助かります」

ペコリとお辞儀をするととりあえず教室に帰ろうとする。だが頭を殴られた後遺症で歩くのがおぼつかない。

「あ、ちょっと待つてろ。もう少しで見舞いが来るから」

「へ？」

「だから見舞いだ。さつきから何人も来てるぞ？たつく、保健室に留まつてれば良いものを……」

多分あいつらだらうが……確かにそうだな。何で保健室に待機してないんだらう？

まもなく穂奈美がなってきた。俺を見た途端頭は大丈夫かやら体に異常はないかとかフラフラしないかとか……

「ちょっとーお前は母親か？！」

「だつて…」

俺が穂奈美の大丈夫かホールに耐えられなくなり声を張り上げると
穂奈美も遮った。目尻には涙が溜まってる。

「だつて…目の前で倒れるんだもん…あた、頭を打たれた…から、
何かあつたら、どうしようつて思つて…」

「あー…」

うん、心配だつたのは伝わつた。ただそんなに泣きながら言うのを
涙を拭き取りながら話しかける。

「ほり泣くな？俺は大丈夫何だしゃ」

「うん、良かつた」

ぎゅっと抱きついて来た。背中に腕が回され頭を俺の胸元に当たつて
きた。
ち、ちゅうとー

「ちよ、穂奈美さん？！」

「いいじゃない、心配だつたんだよ？」

クイックとその状態で頭だけ上げたから上目で俺を見てきて…「うわあ
！真面目に可愛いとか思つてしまつた。」

ただ、よしやべ田の前の現実に追いついたので頭を撫でてやる。

「まあ…心配してくれてありがとつ」

「ん」

田を締めて返事をした。嫌なのかな…？やめとくか。

やめると穂奈美は「こんな事を言つて来た。

「お願い、もつと」

「へつ？」

もつととは多分じゃなく確実に頭を撫でないと言つた事だひつか。
まあこいけど…撫で撫で。

「何かね、気持ちいい」

「そつか」

お互い暖かさを感じあつてると俺はふと思つた。こには…保健室だ
よな。じゃあ妙子先生がいるわけで…

「よう、そのままベッド」「ダイブとか許さんぞ?」
「いぐつ

下品なセリフと表情でいつてくる妙子先生。穂奈美もその存在によ
うやく気づいたようだ。

「あ、妙子先生。い、いつからいたんですか?」

「最初から居たよ!お前らが異空間作る前からずっといたから!」

涙目の中子先生。大人げない、つーか、大人気なさすぎむ。ただの
子供だ。

「ん…じゃあカメラで撮りながらやるか私を混ぜてするならベッド
貸してやう」

「後ろの選択肢は何ですか?」

「うつさいー私だって彼氏が欲しいんじやー!」

「えー……ん?」

「気がつかなかつたが」の余話は俺と穂奈美が恋仲だという前提で話されてないだろ? か? ちょっと聞いてみよ。」

「あのー……俺ら付き合つてしませんよ?」

「は、嘘だろ? わざわざから生徒間でお前らの事をカッフルだの何だの言つてるだ?」

「……はあ?」

何の事だか分からない……どうしてそんな噂が? 仲が良いとかそれならまだしも恋人?」

「あ」

「どうした、穂奈美?」

穂奈美は何かに気がついたらしく、懇意一寧に教えてくれ。

「多分ね、毎休み私の言葉が原因だと想つよ」

「はつ? ……ああ」

確かにここに何かわけわからなくなつてゐる時に奴らに向かつて私の最高の彼氏だとか叫んでたよなー……

「ああ、最高の彼氏なんだっけ、俺は」

「んなわけあるか、バカ。最高の親友よ」

「あれま残念」

最後のは「冗談だけど最高の親友……男女の友情つてやつか? ……良いね。」

そういうの好きだよ。

「はいはい、良いから帰りなさい。説明は穂奈美がしてくれたらし
いから面倒な事後処理はないから安心しな」

「ん、はい。ありがとうございます。失礼しました」「
ああ、じゃあな。… ッチ、隠し撮りで一儲け…」

無視する事に決定。

俺は教室に向かう事にした。幸平達は帰つてもらつたらしい。曰く
『私の責任だから!』らしい。ありがとうの意を込めて頭を撫でる
と気持ち良さそうに手を細めた。

…やばい、俺もクセになりかけてる…

一緒に帰るからと言つて教室に入る。散らかされてたはずの教室は
綺麗に片付いていた。

鞄を取り廊下に出る。穂奈美の教室を除くと…着替えてた。

俺は慌ててそっぽを向く。

さつきまで忘れてたんだけどそついや少しだけ破けてるのを思い出
した。…黒…

「今、覗いたでしょ?」

「うわあ!」

肩をがつしり掴まれて驚く。見るとジト目の穂奈美さん。

「今、見たよねえ?多分、下着も見れたんじゃないかしら?」

「み、見てないよ!」

「じゃあ、さつき黒とか言つてたのは何だったのかしら?」

「それは…」

言葉が詰まる。じつ返したら良いものか……ああ！

「今日のワッキーカラーだつたんだ」

「占いかしら？」

「ああ」

とつあえず誤魔化した。良い感じに流せた気がする。

「今日は珍しく赤なのよ」

「え、黒くなかつ……あ」

「やつぱり見たのね！私の純情返して！私の純潔を返して！」

「お……」

「良かつたねえ、私の下着が黒で。ワッキーカラーなんでしょ？運も上がつたし田の保養にもなつたから良かつたね、このスケベ！」

プリプリ怒つたふりをして帰つた。とつのも笑いながら言葉を發していたのだ。

ちよつとおかしくなつてそのままにしていた。

「いらっしゃ、帰るぞ。芳樹の家で夕飯を作るから

「いや、何で？」

「私の所為で怪我したんだからそのへりこられせよ

」

帰り道、俺は穂奈美の自宅訪問を柔らかく拒否する事をすつとじつあえず、ファーストフードを齎つてもひつ事に収束した。

女の子が男の子の家に簡単こぐるものじやありません！

ファーストフードを食べて家に帰る。とりあえず、不安だと呟つ事を隠して穂奈美の家に送った。

「また明日ね、芳樹。頭また怪我しないでね？」

「怪我したら泣いてくれるか？」

「ば、バカ！誰が泣くか！」

本田最後の軽口。いや、最後のは照れ隠しかな？

「Good Afternoon」

「サヨウナラ…ね？」

「ああ、また明日」

「バイバーイ」

手を振つて別れる。

帰つたら看病御礼に何か作つてやるかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3897y/>

少年少女のソノリティ

2011年11月27日08時49分発行